

●次期社長紹介・挨拶質疑応答議事録

日時 : 2010年1月29日(金) 18:00~18:30
場所 : 富士通汐留本社 24階大会議室
説明者 : 代表取締役会長兼社長 間塚 道義
執行役員副社長 山本 正巳

質問者A

Q. 新社長は指名委員会の3人が全員一致で選んだのですか。また、副社長の人選についても全員一致で選んだのでしょうか？途中のプロセスを含めて教えてください。

A. (間塚)

プロセスについてお話しします。指名委員会において、大浦委員長と野中委員と私の3人で、当社の置かれた環境と今後の変化、社長が具備すべき条件、副社長を含めた執行体制等について検討しました。

その中で大浦委員長には、副社長、上席常務、常務、それに執行役員の一部と面接して頂きました。野中委員は当社のグローバル人材の育成に関わって頂いており、当社の人間をよく知っていらっしゃいます。

お二人と私による検討を進めて、数人の候補の中から、今後の他社との厳しい競争や富士通がこれからやろうとしていること、クラウドコンピューティングやヒューマン・セントリックといった今後の流れを踏まえて、最終的に全員一致で山本を選びました。副社長の人選についても、即断即決を求められる時代に対応し、前向きな改革を進めていくのにふさわしい人材を選びました。副社長についても委員全員の一致で選んでいます。

Q. 歴代の社長のキャリアを見ると、最近サービス事業、それ以前はメインフレーム／プロダクト事業出身の方々でした。山本副社長は、プロダクト事業の出身とのことですが、今後のビジネスの方向性についてどうお考えですか。

A. (山本)

私はプロダクト事業の出身ではありますが、サービスビジネスを核にグローバルカンパニーを目指すという当社の方向性が変わることはありません。

プロダクト出身の私が次期社長に選ばれた理由を自分なりに考えてみました。世の中の変遷を振り返ると、新たな時代が生まれる時には、テクノロジーの革新があったと考えます。ネットワークの革新がインターネット時代に導いていますし、昨今のクラウドコンピューティングもインターネットの更なる進化や仮想化技術等の新しいテクノロジーが出てきたことで新しい時代に突入したと考えます。これからも新しい時代にはテクノロジーの変革や新しいものが出てくると考えられます。私はこれまでワープロ、PC等いろいろな変革の時代に立ち会ってきました。そうした経験の中で培ってきた勘が、これからのクラウド時代やその先のヒューマン・セントリックといった富士通の向かう世界に活かせると考えております。

質問者B

Q. 新体制下では、グローバル化の取り組みが加速されるのでしょうか？急速なグローバル化にはリスクが伴うと思うのですが。

A. (山本)

急速にグローバル化を進めることにリスクがあることは十分承知しています。中期計画において海外売上比率を 40%強とする一つの具体的なグローバル化の指標を掲げているので、これを出来るだけ早く実現したいと考えています。また、これまで富士通サービス(FS)、富士通テクノロジー・ソリューションズ(FTS)の完全子会社化や、M&A など、グローバル化を確実に進めてきましたので、この路線を継承し、加速させていきたいと考えています。

Q. M&A に対するリターンなど、目標値のハードルを少し下げてもグローバル化を加速させるのでしょうか？

A. (山本)

確実に利益を確保しなければならないので、当然、M&A は一定の基準を設けて判断していきます。その基準を下げるといった考えはありません。

質問者C

Q. 富士通はこれからのビジネスを進めていく上での「強い基盤」が出来たとお話でしたが、野副前社長は、国内の IT サービスをもう一段強くできるとのお話をされました。グローバル化の他に、国内において取り組むべき課題はありますか。

A. (山本)

富士通のグローバル化について、私は「日本発のグローバル IT カンパニー」を目指したいと考えています。そのためには、日本国内のビジネスがしっかりしていることが大前提と考えています。日本国内のビジネスがしっかりしていないとグローバルにビジネスを進める上で足腰が弱くなります。国内ビジネス基盤の強化は当然取り組むべき課題と考えています。

質問者D

Q. CEO や COO など、山本新社長の位置づけはどう考えればよいのでしょうか？また、副社長 5 名の取締役への就任についてはどのようにお考えでしょうか？

A. (間塚)

当社は CEO や COO といった役職名を使ってはいませんが、6 月の株主総会で株主のご了解を得て、代表取締役社長に就任させていただきたいと考えております。その他の取締役人事については未定です。

Q. 山本副社長はパソコン事業出身ということですが、同事業では Apple のスティーブ・ジョブ氏などが優れたリーダーとして有名です。ご自身はどういうリーダーになりたいと考えていますか？

A. (山本)

富士通も LOOX U というポケットサイズのノートパソコンを発表しており、いろいろなことにチャレンジしています。一人の強力なリーダーが全体を引っ張るとするのが理想的な形なのかもしれませんが、私としては協力体制の中でいろいろな知恵を出し合って確実性を高め、会社を引っ張っていくという考えでおります。

Q. リーダーとしてつらい決断を強いられることもあると思います。知恵を出し合っても話がまとまらない時などは毅然と判断をされますか？

A. (山本)

当然最終的な判断は私が下したいと思います。

質問者E

Q. これまでの富士通は IBM を意識してきたと思いますが、今後はどこの会社を意識していくのでしょうか？

A. (山本)

私としては、IBM、HP に対して関心を持って見えています。今後も彼らと当社のベンチマークをしっかりとやっていきたいと思っています。

質問者F

Q. これからの1年間、何を一番の優先事項としますか？

A. (山本)

いかに利益をあげていくかということです。具体的にはクラウドコンピューティングの時代に富士通の方向性はどうかということとを徹底的に考えていきたいと思っています。

Q. マネジメント体制として当面は間塚・山本両氏の二人三脚体制となるのでしょうか？それとも山本氏が前面に立つ格好となるのでしょうか？

A. (間塚)

経営執行はあくまでも山本に任せたいと思いますが、私の考えることもその時々できちんと申し上げたいと思っています。ずっと営業をやってきましたので、お客様やパートナー様のご意見を経営に反映させることが私の役割だと考えています。

質問者G

Q. ORACLE による Sun の買収が完了しましたが、富士通にとって彼らとの関係が今後どうなることが理想だとお考えですか。

A. (山本)

ORACLE はデータベースをはじめ、良いソフトが多くあります。当社は、高性能 CPU や高信頼ハードウェアを作る高い技術を持っています。サーバ用 CPU を作る事が出来るのは当社以外は IBM とインテルくらいだろうと考えています。当社の強いテクノロジーと ORACLE が持つ強いソフトウェアが組んで UNIX の世界においてグローバル

にビジネスを展開できることが理想です。

Q. 半導体事業について、野副前社長はファブライトを進め、場合によっては撤退もありうるとお話されていました。改めて今後の半導体事業に対する考え方をお聞かせください。

A. (山本)

半導体事業は、サーバ用 CPU を作る上で必要であり、コアだと考えています。構造改革を進め、黒字体質化を急ぎ、強い基盤とすることが緊急課題だと認識しております。

Q. ということは、大きなリターンを求めるために、ある程度のリスクをとるといった経営スタイルに変わるのですか。

A. (山本)

ORACLE との協業については、これまでも良好な関係を構築してきており、今後についてもリスクがあるとは考えていません。Sun との関係以上のものを築けると思っています。

半導体については、構造改革を進めてきたことで、この1年でリスクは大幅に減ったと考えています。今後も改革を進め利益体質にしていきます。

以 上